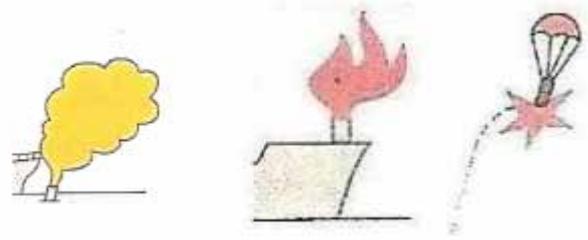


6. ロケット信号

遭難信号にはいろいろの方法がありますが、ロケットによる信号は、打ち上げ花火のようなもので、火薬で噴射して赤い炎火を放ちながら上昇して遭難を知らせる方法で、文字通り火の玉が飛んでいくようです。



同じ様な方法として落下傘に照明弾を吊して打ち上げ赤い炎が輝き落下傘ですからしばらくの間空に浮かんでおります。

タイタニック号は盛んにこのロケットを打ち上げており、カリフォルニャン号の当直者もこのこれを認めて船長にも報告しておりますが、白っぽい光だと報告しており、船長もあまり関心を持たず、就寝してしまうという残念な結果となり、後の査問委員会ではロケット信号を全く見なかった証言していますが、これは保身のためでしょう。

当直者もロケットの打ち上げを8発目撃していながら、客船が花火を打ち上げていると思ったと証言していますが、これまたおかしな話で客船が真夜中停船して花火を打ち上げて興ずるのでしょうか、しかも冰山が存在する寒い海域です。火矢の色が白く見えようが、これは遭難信号のロケットだと判断するのが当然です。

船舶は24時間航走しておりますから、当直勤務は世界共通でAM・PM0800～1200は三等航海士（機関士）、1200～0400は二等航海士（機関士）、0400～0800は一等航海士（機関士）で日に二回当直で計8時間の当直に入ります。これに操舵手（操機手）が付きますから二人一組の態勢です。衝突事故の時間帯は三等航海士の時間帯で、まもなく交代時間になって引き継ぎ事項としての連絡はないままに交代し、二等航海士もあまり関心がないままこの重大事を見過ごしております。距離としては水平線上に船体を認め、また救命ボートからも漂泊中の停泊灯が見えたとの証言からすると10海里以内、せいぜい7～8海里位でしょう。明らかにフューマンエラです。